青少年育成センターだより

第１７８号　２０２４．３．１

防府市教育委員会生涯学習課
青少年育成センター
０８３５－２３－３０１３

親子愛（２）

今年の１月１日に起きた能登半島地震から二カ月が過ぎました。被災地も徐々に普通の生活に戻りつつあります。しかし、物は作りなおせば元に戻りますが、身近な人をなくされた方の心の傷はなかなか癒えることはありません。

「青少年育成センターだより１７７号」では、母親を助けるために亡くなった夫の話から「親子愛」について考えました。今号においても、「親子愛」について考えてみましょう。

ずっと一緒にいたかった

妻子と最後の別れをした３日後、金沢市の自宅で大間圭介さん（４２）は絵本を手に取り、ゆっくりとページをめくった。１階の６畳間の本棚には、１００冊ほどの絵本がぎっしりと並んでいる。同じ部屋には四つの骨箱が安置され、遺影の中の４人は優しくほほえんでいた。元日の地震で、石川県珠洲市仁江町にあった妻の実家が土砂崩れに巻き込まれ、妻と子ども３人が犠牲になった。絵本は何度も読んだから、折れたり破れたりしている。長女優香さん（１１）、長男泰介さん（９）がまだ小さい頃、読み聞かせをよくせがまれたという。次男湊介ちゃん（３）のお気に入りは「ノラネコぐんだん」シリーズだった。「野良猫のいたずらが過ぎて説教されるんです。次男はよく笑っていました」アンパンマンの人形、電車のおもちゃ・・・。どれを見ても、子どもたちと過ごした記憶がよみがえる。形が崩れないようひもで巻いた野球のグラブは、珠洲出身の大間さんが地元の先輩から譲り受けたものだ。休日になると、泰介さんと公園でキャッチボールをした。「でも、もう使うことはないな」と目を伏せた。「おかえり」「ぎゅっ」。仕事から帰宅すると、いつも息子２人が駆け寄り、抱きついてきた。優香さんは少し大人びた様子で、卵とワカメのみそ汁を出してくれた。「優香が作ったの？おいしいやん」と言うと、何ともうれしそうな顔をした。・・・

・・・「現実を受け入れないと」とも思う。だが、食事をする、風呂に入るといった日常の営みのたび「本当はみんながいる楽しい場所のはずなのに」との思いがこみ上げる。「ああ、もうみんないないんだなあと涙が出てくる」・・・

・・・３月になったらひな人形、５月にはかぶとを６畳間に飾ろうと思う。「この家から離れるつもりはない。これからも５人で過ごしていく」。４人の誕生日には、お祝いをするつもりだ。リビングのテレビの近くには、リモコンを入れる箱が二つある。優香さんと泰介さんが、学校の授業で作ったものだ。見慣れた筆跡のメッセージが添えられている。

「パパへ　いつも見守ってくれてありがとう」

２０２４．１．３１　毎日新聞

いかがでしょう。本当に心が痛む話ですね。

みなさんにも「ずっと一緒にいたい人」がおられることでしょう。今一緒にいる人を大切にしてください。

文責＝青少年育成センター指導員　藤村